

# 家族援助に対する看護者の意識調査 (第1報)

## — 質問紙の作成過程 —

若林 由香・曾田 陽子・梶谷みゆき

### Study of Nurse's Consciousness toward the Family Nursing (Part 1)

#### — Development of Questionnaire —

Yuka WAKABAYASHI, Yoko SOTA  
and Miyuki KAJITANI

## 概 要

平成8年度の医療施設内で働く看護者の聞き取り調査から、看護者の家族援助に対する考え方の示唆を得た。

今回はその結果を基に、看護者の家族および家族援助に対する考え方を明らかにするための質問紙を作成した。質問紙の作成過程を報告する。

キーワード：看護婦—患者・家族関係, 家族援助, 質問紙, 家族看護, 意識調査

## I. 緒 言

今日、核家族化や少子化などの家族形態の変化, 高度医療の発展に伴う医療情勢の変化, そして高齢化などが契機となり, 看護分野における家族看護への関心は急速に高まってきている<sup>1)</sup>。従来, 保健婦などの地域看護活動においては, 患者を支える家族の不安に応えたり指導などをすることにより, 家族も援助の対象と捉えていた。一方, 施設内の看護においては患者を家族から切り離れた環境での療養であるため, 家族も看護の対象であるという意識は薄かった。ところが, 「患者ひとりが看護の対象である」という考えでは援助が成り立ちにくくなり, これまでの認識を, 家族にも援助が必要であるという認識へ変えることが求められるようになった。しかし, 変化の必要性は感じ実践しようとしているが, 現状では, 看護者の多くは家族援助に

対して達成感が得られず, 不全感を感じている。

この不全感の背景には, 平成8年度の聞き取り調査で得られた看護者の家族援助に対する考え方が影響していると考えた。

そこで今回は, 昨年の聞き取り調査において得た知見をもとに, 看護者の家族援助に対する考え方を明らかにするための質問紙を作成し, 調査を行った。ここでは, その作成過程を述べる。

## II. 作成過程

### 1. 既存理論・先行研究の検索, 比較検討

(平成8年12月)

過去5年間における「家族」「家族看護」「家族援助」「患者家族—看護婦関係」をキーワードとする先行研究を学術情報センター情報検索・最新看護索引等を用いて検索した。患者・家族を対象にした看護過程の展開や退院指導を中心

としてまとめたものが多く、看護者の家族援助に対する考え方を量的調査したものはなかった。従って、今回質問紙の作成にあたっては独自のモデルで質問紙を作成することにした。

質問紙を作成することは、以下のような意義があると考えた。

- 看護者の家族に対する考え方を量的に把握できる。
- 施設間や病棟間で、意識の比較が出来る。
- 家族援助を抑止する因子を発見し、改善にむけての方法が考えられる。

### 2. モデル原案の作成 (平成9年1月上旬)

平成8年度の調査2)から、「看護者の家族援助に対する考え方」は、「対象としての家族のとらえ方」「家族援助の必要性の認識」「家族援助の困難性の認識」「家族援助の実践感」に影響を受けると考え、原案を作成した(図1)。

### 3. モデル原案の検討・修正と作業仮説の作成 (平成9年1月中旬～同年2月中旬)

概念枠組みを作成するために、モデル原案を作成するもととなった項目について再度検討を行った。

図1の「家族援助の困難性の認識」には、家族と関わるにはある程度の時間が必要である、在院期間が長いと家族と関わる事ができる、

救急の場面などでは余裕がない、忙しいから家族のところに行って話が聞けないなど、時間の制約や看護業務の忙しさに関わる項目が多く含まれていたため「家族援助を行う上での時間的制約感」とした。

「家族援助の必要性の認識」には、援助の必要性はわかっているが家族の問題に対しては年長者の方が関わりやすい、婦長は家族に関わりやすいし婦長も自分の仕事と思っている、スタッフ間で家族へのフォロー体制が整っていない、自分より年上の人を抱えている問題に首を突っ込むことに対してためらいがある、経験がものを言うなど、役割分担や役職、年長者という考え方が多く含まれていたため「仕事上の役割」とした。

「家族援助の実践感」には、どう関わっていったらよいかわからない、家族と接触するタイミングが見つからない、家族が患者さんに対する役割を継続できるように助ける、家族が気持ちを表出しやすい場を設定するなど、家族への援助の方法に関する項目が多く含まれていたため、「援助方法の明快さ」とした。

「対象としての家族のとらえ方」には、内縁関係は家族とは言えない、患者の重要他者は子供・配偶者(未婚であれば親)である、家で死ぬことはよいことである、相手の立場で考えることが大切、など看護者の価値観や先入観など

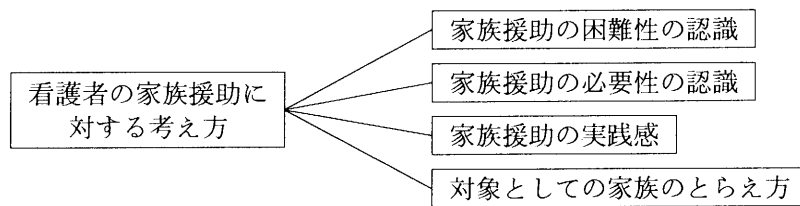


図1 モデル原案

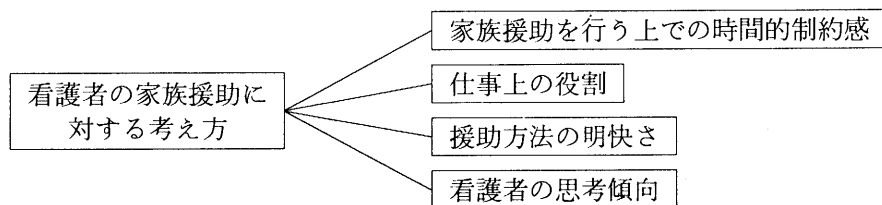


図2 概念枠組みの修正

によるものが多く含まれているため「看護者の思考傾向」とした。

以上のようにして、図1のモデル原案を図2のように修正した(図2)。

この枠組みから「時間的制約感を感じやすい看護者は家族援助を推進しない」「仕事上の役割分担が明確ならば家族援助は推進される」「家族への援助方法が明確ならば家族援助は推進される」「社会規範に影響を受けやすい看護者は家族援助に困難性を感じやすい」と理論仮説を立てた。

調査目的は、「臨床における家族援助と、看護者の思考傾向・時間の制約感・役割の明確さ・援助の明快さの関連を明らかにする」とした。

この作業と同時に理論仮説から作業仮説を導き出し、質問紙の項目出しを行った(表1)。

表1 作業仮説

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 時間的制約感と家族援助の推進力には強い負の相関がある。</li><li>② 役割分担の明確さと家族援助の推進力には強い正の相関がある。</li><li>③ 援助方法の明確感と家族援助の推進力には強い正の相関がある。</li><li>④ 社会規範の影響の強さと家族援助の困難感には強い正の相関がある。</li></ol> |
|---|

#### 4. 質問紙の作成(平成9年2月中旬)

##### 1) 質問文の作成

第1段階として、24の質問を作成した。作成にあたっては、聞きとりで抽出された言葉をそのまま使用したが、わかりにくい表現や誘導的な質問項目が含まれるなどしていたため、プリテストを行い修正を加えた。

##### 2) 尺度と分析方法の決定

尺度は、非常にそう思う・少しそう思う・どちらともいえない・余りそう思わない・全くそう思わないの5段階とした。また処理のしやすさを考慮しマークシートによる回答にした。回答の選択は1つの質問につき1つとした。

分析方法は、無相関の検定を行うことにした。

#### 5. 質問紙の修正とプリテスト(平成9年2月下旬~同年3月中旬)

以後、河口<sup>3)</sup>の質問紙修正のための視点を参考にし、以下の視点で5回の修正を繰り返した。

- 内容の吟味
  - 不足している項目はないか
  - 答えにくくはないか
  - わかりにくい表現はないか
  - 意味をはき違えそうな言葉はないか
  - 表現を統一する
  - 質問の順位を考慮する(誘導的でないか、思考の流れとしての答易さ、唐突でないかどうか)
- また、1つの質問には1項目のみを入れた。最終的に40項目を作成した。

#### 6. フェイスシート、依頼文の作成(平成9年3月中旬)

フェイスシートでは、家族援助に対する考え方に影響をおよぼすと推察した性別、年齢、勤務年数、勤務病棟、家族構成等をたずねた。

#### 7. 信頼性

平成9年3月24日~同年4月24日に、県内3施設の看護者866名(有効回答777名)を対象に留め置き法によるアンケートを実施した。アンケートの結果から内的整合性をみるため、質問を偶数問題と奇数問題に分け、折半法で行った。スピアマン・ブラウンの公式により修正をかけ、信頼度係数0.78を得た。

### III. ま と め

聞き取り調査をもとにした独自の概念枠組みを用いて、看護者の家族援助に対する考え方を問う質問紙を作成した。

この質問紙を使ってすでに調査を行っている。今後その結果をもとに、概念枠組みの検討や質問紙の精選をしていきたいと考えている。

### 引用文献

- 1) 鈴木和子：高齢社会における家族看護学研究の課題, 看護研究, 27(2-3), 63-70, 1994.
- 2) 梶谷みゆき, 曾田陽子他：看護における家族援助の現状—臨床看護婦からの聞き取り調査より—, 島根県立看護短期大学紀要, 第2巻, 41-47, 1997.
- 3) 河口てる子：看護実践に即した調査研究計画の実際 実践編②：調査票の作成例より, 看護研究, 29(4), 75-79, 1996.

### 参考文献

- 河口てる子：実態調査と調査研究の「差」調査研究と呼べる調査とは：理論編, 看護研究, 29(2), 69-75, 1996.
- 河口てる子：看護実践に即した調査研究計画の立案 実践編①：概念枠組みから調査票まで, 看護研究, 29(3), 89-93, 1996.
- 河口てる子：看護調査研究の実際 実践編③：調査の実施手順, 看護研究, 29(5), 91-96, 1996.